

## 人、暮らし、そして民具 ～琵琶湖の伝統的木造船丸子船を中心に～

牧野久実（教育学科・准教授）

### 教育における民具の活用～特にハンズオンの観点から

近年、地域の文化財、特に民具について、保存だけでなく活用する動きが各地の自治体や博物館、資料館で見られる。特に滋賀県には多種多様な民具が残されており、地域の伝統文化を理解するために活用されてきた。しかし、実際にそれらを使っていた世代は少なくなり、民具を身近な生活用具ではなく文化財として認識する世代が増えつつある。こうした中、民具を映像や説明文とともに展示するなどして理解を促す試みが一般的になされているが、それだけで若い世代の心を掴むことは容易ではない。

一方、小中学校においては平成14年度より、高等学校においては平成15年度より、それぞれ総合学習が本格的に実施されるようになった。画一的といわれる学校の授業を変えて、地域や学校、子供たちの実態に応じ、学校が創意工夫を生かして特色ある教育活動が行える時間、国際理解、情報、環境、福祉・健康など従来の教科をまたがるような課題に関する学習を行なえる時間として新しく設けられたものである。こうした中で、若い世代に民具を用いながら伝統文化を学習させることに関心が寄せられている。民具を道具として生き返らせ、地域住人に訴えかける文化財とするにはどのようにしたらよいのか。ひとつの方法は、近年博物館学の世界に広まりつつあるハンズオンの手法である。ハンズオンとは実物に対して五感を使ってアプローチする手法である。本稿では、この手法を滋賀県立琵琶湖博物館における琵琶湖の伝統的木造船、丸子船を通じた展示および交流活動をもとに紹介したい。

滋賀県立琵琶湖博物館は1996年10月に滋賀県草津市の烏丸半島に建設された「人と湖」をテーマとする総合博物館である。琵琶湖を中心とする国内外の湖沼地域について、自然史、歴史・民俗、環境という観点から総合的に学習するための拠点となっている。開館までにおよそ10年を費やし、その当時から「準備室なれど博物館」をモットーに地域住民との活動を展開してきたこと、また展示手法が当時の日本ではまだ珍しかったハンズオンに立脚していることなどが評判を呼び、いまだに年間50万人という来館者を集めている。

ハンズオンは19世紀末にアメリカで興った子供博物館（チルドレンズ・ミュージアム）の発達過程において開発された。子供博物館のさきがけとなったのは、1899年にニューヨークに設立されたブルックリン子供博物館である。1890年代にこの博物館の芸術科学研究所が移転することになり、所蔵品を整理していた際に研究所の基準に達していない資料をもとに子供向けの博物館を作ったのがきっかけであった<sup>(註1)</sup>。その後、アメリカの哲学者で教育学者であるジョン・デューイが学習における個人の経験の重要性を強調することで教育界に新風を巻き起こしたり、また、イタリアで最初の女性医学博士であるマリア・モンテッソーリが、教育とは大人が子供に厳しく教え込むのではなく、子供たちが自発的に学びたいと思う環境づくりが重要であると説いたことをきっかけに、子供博物館の建設に拍車がかかった。しかし、当時はまだハンズオンという手法は意識して取り入れられてはいなかった。

子供博物館に一大変革を与えたのは、スイスの心理学者、ジャン・ピアジェの「ものを知る

ということは、それに基づいて行動することである」という児童発達理論、すなわち「学習は、実際の世界から、そしてそれを取り巻くものから生ずる」という考え方である<sup>(註2)</sup>。1964年、ボストン子供の博物館の館長であるマイケル・スポック氏はこのピアジェの理論を実践し、ハンズオンの手法を定着させた。彼は育児書で知られるベンジャミン・スポック博士の子息でもある。小学校5年生まで本を読むことができなかった彼が通っていた特別な学校で採用していたのが、身体を使って参加体験型の教育であった。このときの体験が後の子供博物館へのハンズオン導入につながったという。

スポック氏は、ガラスの展示ケースを取り払うことで、子供が展示物に対してより親近感を持てるような環境を作り出した。この新しいタイプの子供博物館の特徴は以下のような点にある。第1に、それまでの展示とは異なり、展示物に触れることを積極的に促すものであること、第2に、展示を楽しむ際に会話したりといった、いわゆる参加型の手法をとること、第3にワークショップ、すなわち身体をとおして考える集団作業が充実していること、第4に展示を回覧するための順路を設けず、また学ぶことを強制もしない、来館者の自主性を尊重するものであること、第5に地域に根ざした施設であり、その運営にまで地域の人々がかかわっているということである。

スポック博士の試みは成功し、アメリカのブルックリン子供博物館やインディアナポリス子供博物館と、ハンズオンの手法を用いた展示に次々と更新された。その数は急激に増加し、70年代には8館程度であったのが80年代には400館以上にのぼった<sup>(註3)</sup>。こうした手法にのっとった子供の博物館は、アメリカのみならず本来従来型の博物館が主流であったイギリスでも1980年代の半ばから1990年代の半ばにかけておよそ10倍と、着実に数を伸ばしている<sup>(註4)</sup>。滋賀県立琵琶湖博物館は、あらゆる年齢層に展示を楽しんでもらえる工夫として、こうしたハンズオンの手法を日本でいち早く取り入れたのである<sup>(註5)</sup>。

### 琵琶湖の伝統的木造船、丸子船と復元製作事業

ハンズオンという子供に教えるという立場から展示物やその周辺の装置を作るもので、子供を引き付ける色彩や音を多用し、どんな扱いにも耐えうるような丈夫な展示、また親子一緒に親しめるような展示という印象が強いかもしれないが、この手法による展示効果は、なにも博物館という限られた空間におけるいかにも子供向けの展示に限って発揮されるわけではない。丸子船とその船大工を通じた十数年の活動を通して、そのことを実感するに到った経緯をここに紹介したい。

丸子船は琵琶湖独特の木造の帆船である。古来より日本の東西南北を結ぶ重要な水運を担う琵琶湖において輸送の主役であった。最盛期の江戸時代半ばには千艘以上の丸子船が琵琶湖を行き交っていたが、江戸時代末に西廻り航路が開通し、また輸送の主役が水運から陸路に変化すると、次第に衰退した。

丸子船の最大の特徴は船体中程の横断面に最も良く表されている。それは、全体に形が丸いことで、その丸みは、船底部のシキ(カタサジキ、ワキジキ、ナカジキ)、その上部のフリカケ、さらにオモギという3つの主なる部分が作り出している。シキは、製材した杉板を縫い釘という特別な船釘を使い、緩やかなカーブを描くように接ぎ合わせる。舷側のオモギは、杉の丸太を縦に半裁したもので、外側に丸太の外面向けて取り付けられる。シキとオモギの間には楨材のフリカケが斜めに取り付けられる。さらに、船体の舳先には、ヘイタと呼ばれる部分がやはり丸みのある横断面を作り出している。ヘイタは、楨材を縦方向に組み合わせ、水押であるシン

に向かって丸いカーブをつけながら構築される。丸子船という名前の由来はその姿が丸みを帯びていることにあると言われるが、その丸みは横断面に最も良く示されているといえる。とりわけ、オモギはその丸みを演出する最大要素である。百石積の船体に取り付けられるオモギの原木は、目通りの周囲が2 m30センチを越える。これを伐採し、ゆっくりと乾燥させた後、縦に半裁し、周囲を削り取る。船体は船底部からシキ、フリカケと順番に組み立てられ、その上部にオモギが取り付けられる。この時、船体のカーブに沿って曲げなければならない。しかし、火で熱して曲げるヤキダメ技法は用いられず、力で押さえ付けながらゆっくりと曲げていく。かつては、周囲の船大工を何人も呼び集めて作業を手伝ってもらったという。

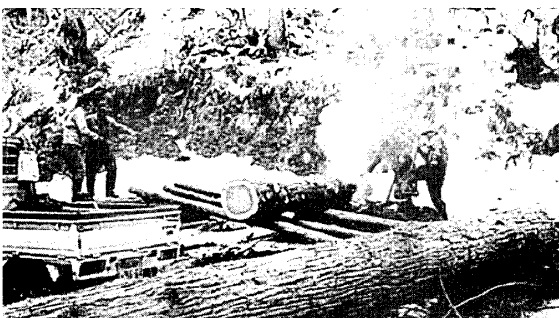
丸子船が最後に建造されたのはおよそ60年前で、現在ではそのほとんどが残されていない。わずかに、当時作られエンジンを積むために改装したものが1艘、そして観光船として大幅な改修を施したものが1艘、そしてその他いくつかの部材が存在するにすぎない。そのような中で、(仮称)滋賀県立琵琶湖博物館準備室では博物館の目玉展示物とするため、平成3年から5年におよそ半世紀ぶりの丸子船復元製作事業を行った<sup>(註6)</sup>(写真1～6)。筆者は、学芸員としてこの事業に携わる機会を得た。



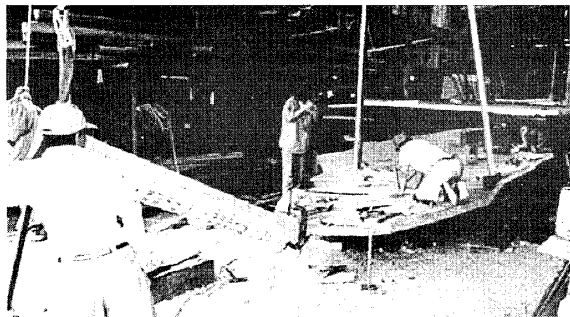
1 木材の選定



4 縫い釘の打ち込み



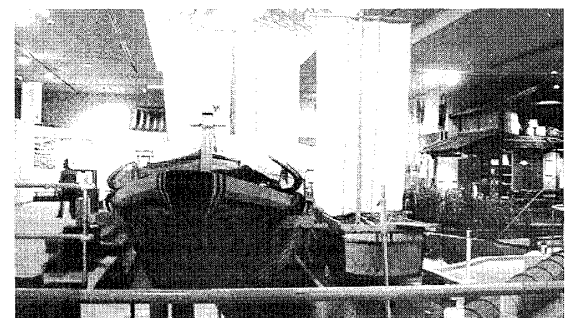
2 木材の切り出し



5 シン(舳先)立て



3 墨付け



6 博物館の展示室へ搬入(向かって左)

写真1～6 (仮称)滋賀県立琵琶湖博物館準備室による丸子船復元製作事業

(撮影: 牧野久実)

船大工は伝統的木造船を建造するにあたって図面を用いない。建造方法と船の構造の詳細は一部を除きすべて船大工の頭の中に残される。そうした技術はいわゆる企業秘密であったし、何より木材という自然の材料を用いるため、図面から実物を仕上げるのではなく、材料を見て船全体の形を整えるという、現在の造船とは異なるプロセスを踏むためである。従って、この復元製作事業が行われるまで、丸子船の建造に関する技術やその他の詳細については、全くといっていいほど知られていなかった。

事業を始めるにあたって最重要事項であったのは、船大工探しであった。多額の費用をかけて行う一大事業であるため、船大工選びはいくつかの条件のもとで慎重に行われた。その条件とは、かつて実際に丸子船を建造したことがあること、できるだけ伝統的な手法で復元建造を行うため、その当時の大工道具を保持していること、現役の船大工であること、この機会に技術を継承するために弟子を持っていることである。これらの条件すべてに当てはまったのは、滋賀県の南部、大津市堅田でご息子とともに造船業を営む松井三四郎氏であった。当時すでに80歳近い高齢であったが、博物館からの依頼にとまどいながらもこの大仕事を引き受けてくださった。

建造したのは百石積、米俵で250俵を積むことができる中型の丸子船である。船体の大きさは、舵を含めると全長19m、幅2.4m、深さ1m、帆柱12mである。建造の過程を観察し、詳細な記録をとるために立ち上げた丸子船復元製作委員会が見守る中、木の伐採から進水式と一般公開にいたる刺激的な2年半が始まった。

広い展示室を展示物で埋めるのは一苦勞である。できれば1点で空間を埋めてくれる展示物があれば有難い。船はそのような絶好の展示物である。恥ずかしながら、筆者と丸子船の関わりは、実はこのような安易な考えから始まったものであった。しかし、松井氏の建造の様子を観察するうちに、そのすばらしさにすっかり魅了されてしまった。この復元製作事業によって、丸子船建造技術の詳細が明らかにされたのだが、それはかつての人と自然の関わり方が凝縮されたものであった。「船釘は新品でも一度海水に浸けて錆を出す。そうすると材に打ち込んだものが抜けにくい」、「積荷の重みや衝撃を受けやすい船底部のシキと船側部のオモギは頑丈な杉材を、水力を受ける舳先や船底と船側の間にあるフリカケは油分を多く含む檣材を、帆柱を含む上回りには細工がしやすい檜材を使う」、「材と材の合わせ目は擦鋸（スリノコ）で曳き、刻み目をつける。そうしたうえで檣肌（マキハダ：檣の皮）を打ち込むと、合わせ目から檣肌がはみ出すことなく、きちんと防水できる」、など、紙面に限りがあるためここではほんの一部しか紹介できないが、その知恵の数々は枚挙にいとまがない。経験があるとはいえ、半世紀も前のことである。いったいどのくらい記憶しているのだろうか、と事業を始める前は半信半疑であったが、作業が進むにつれて船大工の動作と語り口は一層滑らかになっていった。「読んだことはすぐに忘れるけど、腕で覚えたことは一生忘れん」。そう呟きながら、船大工はかつての伝統的木造船をとりまく様々な事象についても語ってくれた。かつては琵琶湖周辺に百を超える多様な形の和船があったこと、船材が大工の手元に届くまでいくつもの専門集団の手を通じていたこと、材を得ることそのものが季節の移り変わりを利用したプロセスであったことなど、こちらも枚挙にいとまがない。

松井氏のライフヒストリーにはこの地域における伝統的木造船の消長を見ることができる。松井氏が船大工としての修行にいそしんでいた20代のころ、琵琶湖にはまだ数多くの木造船が行きかっていた。しかし、新しい推進具の開発や交通網、そして交通手段の発達によって次第

に歴史の舞台裏へと追いやられるようになる。輸送の主役であった丸子船は陸路の整備とともに他の交通手段へその地位を譲った。エンジンが開発されると、すばやくどこへでも魚を追うことが要求される漁船の形が急速に変化した。農道ができて農作業に車やリヤカーが使われるようになると、田舟は次第に消えていった。また、だんだん入手しにくくなる木材に代わって鉄鋼船やファイバーグラスの船が台頭するようになった。

これらの変遷には、この地域において人々が湖を中心とした自然環境との間にいかなる関係をうちたててきたかという点が反映されている。古代においては琵琶湖を中心に日本の東西南北が結ばれるほどの重要な位置づけでありながら、現代では観光船しか走らず、景観としての意味しか持ちえなくなってしまう琵琶湖において、和船の形態、種類、数、といったものの変遷やその背景を追うことで、近代化の過程における人と自然環境のあり方を理解するきっかけになる。松井氏の言葉と身体を通じて明るみになったのは、人と自然環境との諸関係のあり方そのものの歴史だったのである。

### 堅田高等学校の生徒たちと船大工の交流

和船というと何か固いイメージを持つ人が多いのではないだろうか。ましてや子供や若い世代が飛びつくテーマではないかもしれない。平成11年に琵琶湖博物館で第7回企画展示「湖の船 木造船にみる知恵と工夫」<sup>(註7)</sup>を開催するまでは、筆者はそのような先入観をもっていた。もちろん松井氏からの和船に関する情報や丸子船復元製作に関する資料も含めながら、全体としてはかつての琵琶湖の伝統的木造船の実物や模型を中心にした展示であった。遊びの要素はあまり含めず、どちらかというところ専門家向きの展示であったが、アンケートを回収してみても驚いた。予想以上に子供からの反響が大きかったからである。特に、「大きくて驚いた」「木の良い匂いがした」「細部の造りが細かい」と、実物の船そのものに感銘を受けたという感想が多数見られた。民具は子供や若い世代を惹きつけるのだということを知った。

その数年後、堅田高等学校図書委員会の小石規予美先生が生徒さん達を連れて、覇気の無い生徒達に何かきっかけづくりをしてやりたいと、相談しに来られた。早速、地元の文化財である丸子船と松井さんのこととお話した。

最初は先生から背中を強く押されながらの活動であつたらしい。しかし、職人の言葉と身体の動きはまたたく間に生徒達の心をわしづかみにした。後に彼らは、松井さんに関する印象を次のように語ってくれた。

「今まで出会った中で一番すごい大人」。

「話を聞いていると鳥肌が立ってくる。一言でも聞き逃したくない。こんな人に出会ったことがなかった」。

「本に書いてある丸子船は、字は読めてもイメージがわからない。そんな時は松井さん。どんなことも一言で解決してくれる」。

「いつ舟屋へ行っても、きりっと立っていた松井さん。背は決して大きくないのに、誰よりも大きく感じた。」。

どの言葉も簡素だが、生徒達の感動が直接伝わってくる。興味は次第に広がり、自ら、地域の他のお年寄りを訪ねて昔の暮らしについて話を聞きに行くようになった。また、丸子船にとどまらず他の博物館へ和船の展示を見に行ったりした。また、調べた結果を学校新聞にまとめたり、文化祭や地域の公民館で発表した。また地域の小さな子どもたちに紙芝居仕立てで伝統

文化の素晴らしさを伝えた。

彼らはどこにでも居るごく普通の高校生である。一見、地域の伝統文化や民具などという地味な事象とは結びつきそうにない若者達が、きっかけ次第でこれほどのめり込むものなのだと感心した。

若者たちの熱意に刺激されたのか、松井さんにも変化が現われてきた。「もう、琵琶湖の船の時代は終わりましたわ。木船の造り方なんて別に人に教える気はあらしません（ありません）。」以前はよくそう洩らしていた松井さんだった。博物館の丸子船建造をきっかけに、各地から和船の実物や模型の注文があったが、実用としての和船が復活したわけでは決してない。「実質的な需要が無い技術を広めても仕方がない。」それが、職人ならではの割り切り方であったのかもしれない。しかし、東京で就職していたお孫さんが和船の造船技術習得のために帰郷されたのに続き、堅田高等学校図書委員会の若い面々が押しかけるようになると、気持ちは徐々に変わっていかれたようだ。船小屋では松井三四郎さんご子息、そしてお孫さんと、三世代で和船に取り組む姿を見かけるようになった。松井さんも堅田高校へ自ら出向いて、かつての和船に関する講演会を行ったりした。また、生徒達は松井さんの手ほどきでカヌーを一艘完成させ（写真7）、実際に琵琶湖を漕いだ。



写真7 堅田高等学校の生徒達が松井さんの手ほどきでカヌーを製作

（撮影：堅田高等学校 小石規子美）

その松井さんは、平成18年5月2日、92歳の生涯を閉じた。堅田高等学校の生徒達のことを気になり小石先生に様子を聞いてみた。電話口の向こうから聞こえてきたのは、落胆した声である。「亡くなる四日前に新一年生を連れて訪ねたところやったんです。もう、あまりのショックで、皆、口がぽかんと開いたままですわ。これから一体どうしたらええのやろ。」これまでの経緯を考えれば、容易に想像できた反応であった。

松井さんの訃報を受けショックを受けている生徒達のきっかけづくりになればと、琵琶湖博物館では地域住人の活動紹介をするための新交流空間『集う、使う、創る』で、生徒達の活動を展示させていただいた<sup>(註8)</sup>。生徒達はこれまでに文化祭や地域の公民館で発表したものに加え、この展示のために新しい作品をいくつか用意してくれた。学校生活やアルバイトを続けながらの準備にはおよそ2週間を費やした。

「昨日も遅くまで作ってはったんですよ。先生、あと10分だけやらせて、とか言うて。こんなん、どうかと思ったんですけど、生徒がどうしても持って行って欲しいと言うんで・・・」

それはビー玉の複雑な動きが迷路を巡り、最終的には小さな紙製の丸子船を前に押し出すという仕掛けであった。小石先生は言葉を続ける。

「これまで誰からも褒められず、また叱られもせずに育ってきた子らばかりやと思います。自分に自信があるわけでもなく、狭い世界の中で特に目立つこともなく。そやけど、この子ら、教室では笑いもせんのに、この活動してるときはすごく表情が豊かなんですよ。この子らの生きる力になってるんです。」

「松井さんは生前、「若い人が丸子船を知って、次の代へと伝えていってほしい。」とおっしゃっていました。その言葉を心に刻んでいます。これからどうやって恩返しができるのか考え中です。」小石先生はそう呟くが、展示の準備に熱中する生徒達を見ていると、とっくに恩返しができていると感じた。

松井さんの訃報を知ったとき、貴重な技と知恵が、持ち主ごとこの世から消え去ったという思いが筆者の心にのしかかってきた。丸子船復元製作事業以来の13年間で、そのうちのほんの僅かは保存継承することができたかもしれない。しかし、この事業が無かったなら、民具としての丸子船や部材は琵琶湖周辺の各地に僅かながら残ったとしても、知識と技の詳細は当人の肉体とともに消えてしまい、二度と元に戻ることはなかったはずである。人類がそれぞれの環境に適応するために工夫しながら暮らし始めて長い年月がたつが、この間、いったいどれだけの情報が失われていったのか、新たな技術開発の裏で人知れず忘れられていった英知の数々はいかほどであったらうか。

堅田高等学校の生徒たちは、松井さん亡き後も活動を続けている。平成19年度は『おはなし隊とおはなし集め隊』と称して、地域のお年寄りの昔話を聞いたり、聞き集めた話を地域の子供たちに読み聞かせているという。この活動は第3回読み聞かせボランティア大賞（主催：読書コミュニティネットワーク）の奨励賞を受賞した。

彼らの活躍を見ていると、失われたかもしれない英知の一部が確実に次世代に引き継がれていることを実感することができる。

## 生涯学習と伝統文化

堅田高等学校図書委員会の活動からは、伝統文化を伝えるには道具とともにその生活者が実際に語りかけていくことが重要であることがわかる。伝統文化に生きた世代が少なくなりつつある現在、伝統文化の伝い手を見つけること、また、その新たな語り部を作っていくことも、民具の意味を後世に残していくために必要である。

実際、こうした人々が、各地の博物館や資料館でボランティアとして活動する機会が増えてきた。北海道にある開拓の村は、1987年に本格的なボランティア制度を導入した。日本では草分け的博物館といえる。活動内容は、展示建造物の解説、村内案内、演示活動、展示資料の監視、観覧マナーの指導、伝統技術の実演、教育普及行事への参加と協力、と多岐にわたる。とりわけ展示解説はこの博物館にとって重要な役割を果たしているため、毎週最低一回出勤と活動が義務化されているほどである。しかし、このことによって展示に対するボランティアの理解はさらに深まり、来館者の要望を直接反映した新たな展示解説書を自らで作るまでになった。来館者に展示をより良く理解してもらおうという点において、彼らの重要性は年々高まっている。

平成13年に開館した地元密着型の浦安市郷土博物館の活動は、伝統文化を介した世代間交流という意味で興味深い。浦安は漁師町として長い歴史を持つ。しかし、昭和46年の漁業権全面放棄以降の埋め立て以後に都市として大きく変貌した。この博物館は、ちょうどその頃に、旧住人とその文化を継承し、かつ新住人との交流を図り、未来の子供達の育成を図ることを目的に設立された。ボランティア達は「もやいの会」と呼ばれ、登録者数はおおよそ300名（平成14年当時）、うち常時活動している人はおおよそ百名と規模が大きい。その多くは、かつて船大工や漁師といった地元の旧住人で、伝統的な技術を持つ。こうした人々を中心とした文化活動グループが、博物館の準備期間から展示作りに関わり、開館後はボランティアグループ「もやいの会」

として展示解説や展示製作にたずさわっている。伝統的な技術を持つ職人が多く含まれることから、その活動は単なる展示解説にはとどまらず、研究・教育活動と幅広い。筆者がここを訪れた際、開館前から会員が集まってきて、それぞれの特技を披露していたことに大変驚かされた。地元の子供たちからの評判も良いようで、体験学習をした子供たちからの礼状が所狭しと展示されていた。伝統文化の語り手としての存在意義が地域全体で認識されていることを感じる事ができた。

滋賀県立琵琶湖博物館にも「はしかけ」という地域住人活動があり、2004年度では11グループ、251名が登録している。歴史民俗の分野で最初に発足したグループは平成13年度に立ち上がった「近江の国中世なんでも探検隊」（以下、中世探検隊と略す）である<sup>(註9)</sup>。当初の発足目的は、翌年に予定されていた企画展「中世のむら探検」において、展示室内で中世の庶民を演じる協力者を募ることであった。展示の主旨は、中世にまで遡る近江の暮らしのルーツを探るというものだが、中世の庶民生活についてはそれほど研究が進んでいない。従って、断片的な情報をもとに実験的な体験学習を重ねることで、中世の庶民生活について少しでも明らかにし、かつ、その成果を企画展示に活かそうというものである。

「中世探検隊」では、中世の衣食住の様子を文献や考古学から可能な限り再現し、これを体験学習しながら、企画展の展示物も同時に作製した。参加者の多くは、近江の伝統文化の担い手である世代層であり、かつての生活の中に文献や考古資料から復元された中世のルーツを実感することができる人々であった。一般には馴染みのないテーマであったが、各人がすでに持つ伝統と経験に新たな情報が重ねられることによって、想像以上の効果を得ることができた。食生活を探る調査では、麦を石臼で挽き、太い麺状に仕立てたものをドジョウと一緒に味噌で煮込んだミソウズを作ったが、「幼い頃にこれを食べた。とても懐かしい。」という参加者がいた。麻の繊維から糸を織り、布に仕上げる作業では「今はなくなってしまったが、昔は家の周りに麻がたくさん生えていて、生活の必需品だった。」という声も聞かれた。まさに、生活者による近江の伝統文化への再現であった。また、時間を追うごとに、自分たちで調査することの楽しさだけでなく、他の人々伝えることの楽しさも覚えていったようだ。

こうした経験を活かして、平成15年1月には琵琶湖の和船を研究するグループ「丸子船探検隊」<sup>(註10)</sup>（写真8）が発足した。参加者は、和船が使われていたかつての琵琶湖を知る世代の地域住人や、その頃の人と湖の環境そのものに関心がありその良さを地域に広めたいと考える人々であった。丸子船探検隊は、かつての和船をめぐる風景復元や和船を実社会に活用するための方法の模索というテーマを中心に活動を進めた。とりわけ重要であったのは、実際に「丸子船探検隊」の会員自身の中に、かつての和船を使った、もしくは和船のある風景を見た経験を持つ人が含まれていたことである。こ

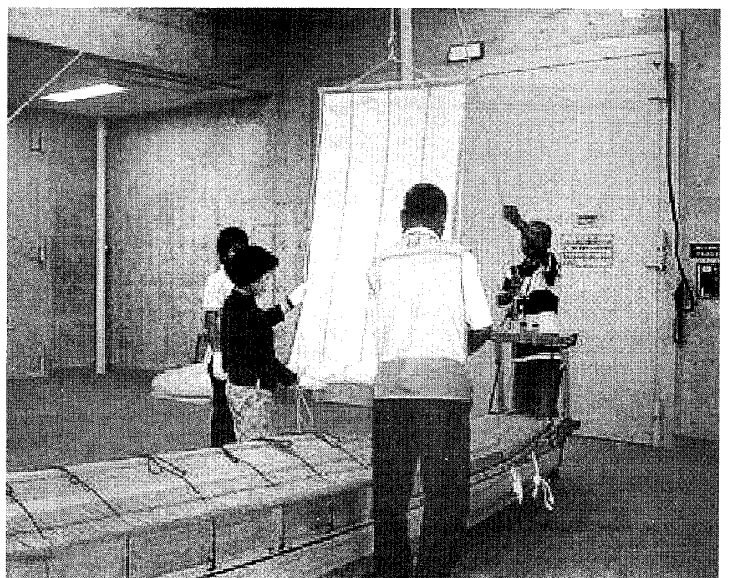


写真8 丸子船探検隊の活動

（撮影：牧野久実）



うした人々の記憶をもとに、模型を用いながらかつての和船をめぐる風景の再現も行った。また、和船に関する来館者からの情報を集めた「丸子船交流デスク」の情報をデータベース化した。一連の活動成果は、地域の公民館や日本全国ボランティアフェスティバルで紹介された。また、フローティングスクール<sup>(註1)</sup>などに出向き、地域の子供たちに和船やかつての和船をとりまく生活について語り聞かせる機会を持った。

このように、子供から大人まで地域住人が一体となって丸子船という実物に触れ、実際に船大工と話し、身体を動かしながら一緒に活動を行ってきた。それら一連の過程には計画だったプログラムが存在したわけではなく、その場の雰囲気に応じながら参加者の自主性に任せて行われた。まさに、人と資料を含めた地域まるごとのハンズオン活動であったと言える。こうしたハンズオン活動が、人の心を揺り動かした、いわゆるマインズオン効果を生んだ例を紹介してきた。機械化、デジタル化がすすみ、我々の生活からはかつてのような環境と密着した関係性が見えにくくなっている。ましてや、若い世代にとっては生まれた時からそれが当たり前であり、いきなり民具を見せても、彼らの価値観の中で位置づけることが容易ではない。しかし、そこに生活者を介することにより、民具の用途や意味だけでなく、当時の暮らし方や考え方も継承することができる。さらには、地域におけるアイデンティティの確立にも結びつく。地域全体でそうした仕組みを作り上げ、地域の活性化を図る、丸子船はそうした可能性を示唆している。

#### <註>

- 註1 目黒実 1996 p.13.
- 註2 前掲 pp.14~15.
- 註3 コールトン.,T 2000 pp.17~20.
- 註4 前掲 p.18 図1. 2.
- 註5 滋賀県立琵琶湖博物館では、ハンズオンの手法を取り入れた常設展示室としてディスカバリールームがあり、齊藤スーザン氏、芦谷美奈子氏がその発足当時の計画立案に尽力した。また、ハンズオンの手法を取り入れた企画展示としては、2004年第12回企画展「のびる・ひらく・ひろがる 植物がうごくとき」植物企画展（担当：布谷知夫氏、芦谷美奈子氏）が好評を博した。
- 註6 復元製作委員会には、事務局として同じく（仮称）琵琶湖博物館準備室（当時）学芸員の用田政晴氏が携わった。また、近江の民俗誌研究者である橋本鉄男氏（故）、神戸商船大学名誉教授の松木哲氏、元関西学院大学文学部非常勤講師（当時）の出口晶子氏、滋賀県教育委員会文化財保護課調査員（当時）の長谷川嘉和氏、元滋賀県教育委員会安土城城郭調査研究所主任技師（当時）の大沼芳幸氏、琵琶湖和船研究家の杉立繁雄氏に、それぞれご協力を賜った。詳細については、用田政晴・牧野久実編 1999を参考。
- 註7 1999年 滋賀県立琵琶湖博物館第7回企画展示「湖の船 木造船にみる知恵と工夫」担当：用田政晴、牧野久実
- 註8 「地域住人による和船調査の成果」平成18年6月20日~7月20日
- 註9 担当：牧野久実、橋本道範、矢野晋吾、内藤又一郎、杉谷博隆
- 註10 担当：滋賀県立琵琶湖博物館 牧野久実
- 註11 フローティングスクールとは、滋賀県内の小学5年生が1泊2日で琵琶湖上にて船内宿泊をしながら環境学習を行う仕組みである。

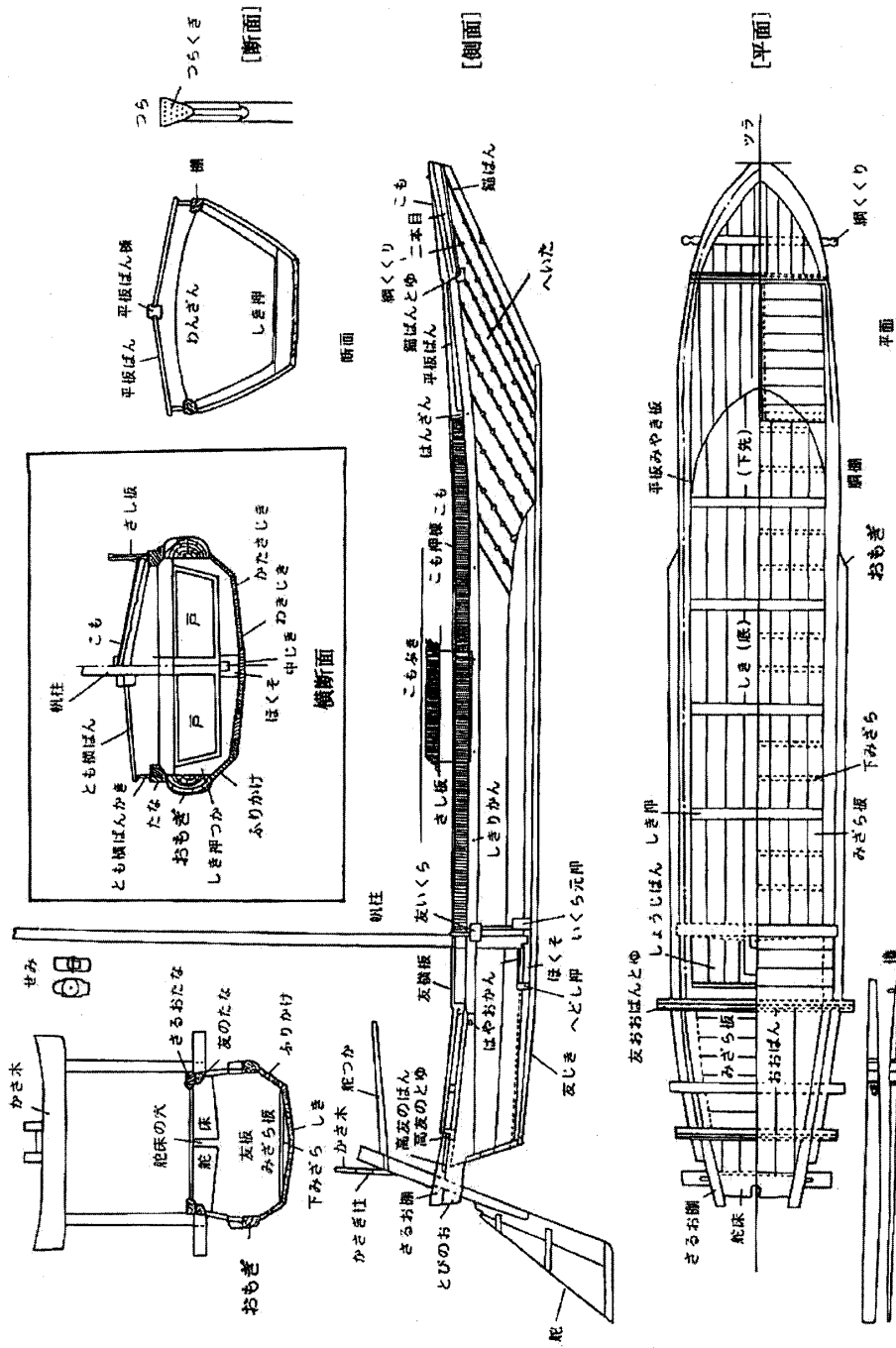
<引用・参考文献>

染川香澄他（訳）（ティム・コールトン著）2000『ハンズオンとこれからの博物館～インタラクティブ系博物館・科学館に学ぶ理念と経営』東海大学出版会 東京。

日本民俗学会編 1989『民俗学と学校教育』名著出版 東京。

目黒 実 1996『チルドレンズ・ミュージアムを作ろう』ブロンズ新社 東京。

用田政晴・牧野久実編 1999『よみがえる丸子船』琵琶湖博物館研究調査報告13号 滋賀。



丸子船一般構造図